

『読書』のメディア史

—文化大革命から天安門事件への読書人的公共性—

比護 遥

はじめに

「読書はしなくてもよいが、『読書』は読まねばならない」(94:167)。(1)の言葉が人口に膾炙したのも今は昔、中国の大学生に尋ねても「本を中心とする思想評論誌」を標榜するこの雑誌を知っている人は珍しい。本論文は、このような雑誌の地位の変遷を跡付けつつ、そこから中国の現代史を捉え直す試みでもある。中でも一九八〇年代という時期に焦点が当てられる。中国の知識人政策は「収」と「放」、すなわち引き締め強い時期と弱い時期の繰り返しであると言われるが、文化大革命と天安門事件という二つの巨大な「収」に挟まれ

た当時の言説空間はいかなるものであったのか。『読書』をメディア史の視角から分析することにより、「読書人」からなる公共性がいかに成立し変容していったかを論じていく。

議論の補助線として、理性的討議による合意を基礎とする輿論(よろん/public opinion)の空間である市民的公共性(ブルジョアの公共性)と読書人的公共性(対し、情緒的参加による共感を基礎とする世論(せろん/popular sentiments)の空間であるファシスト的公共性(ラジオ人的公共性を対置した佐藤卓己による理念型を援用したい)。(2)一九六六年から七六年まで続いたとき

れる文革は、毛沢東が発動した共産党内部の権力闘争という側面があるのと同時に、集会やラジオ、映画、ポスター、壁新聞などをメディアとして、「紅衛兵」と呼ばれた若者たちが熱狂的に参加した大衆運動としての側面もある。その性格は、表面的なイデオロギーの違いにもかかわらず、ファシストの公共性に立脚した参加型動員の民主主義であったと言っている。だとすれば、文革の後、いかにして市民的公共性＝読書人的公共性が再興されたかということは重要な論点となるはずである。

「読書人」という語は本研究の分析概念であると同時に、第一章第二節で見のように『読書』の読者層を名指す当事者自らの呼称でもある。多義性を孕んだ原資料のニュアンスを尊重するために、あらかじめ厳密な定義を定めることは敢えてしない。ただ単に趣味的に本を読むのを好むだけでなく、知的な行為に従事する自負や特権性をも含意されていることさえ踏まえれば、本論文の読解には十分であろう。この含意ゆえに、知的

エリートとしての「知識人」などとも連続的な概念であり、特に互換可能であることを強調する場合は「読書人」「知識人」などの表現を用いることもある。

毛沢東時代から鄧小平時代への知識人政策の変遷とそれへの対応については英語圏を中心に研究が進んでいるが^③、彼らがいかなる空間において相互コミュニケーションをしたのかというメディアへの関心は不足していた。『読書』という一つのメディアに着目して定観測を行うことにより、知識人の社会的位置の変容の模式を示すことができると考える。

公共性の空間としてメディアに着目する際、その性質を捉える上で考慮すべき要素として、国家権力の距離感が当然問題になることに加え、社会や経済との関係も重要である。専門知識に立脚しつつ広く公共的な論点に対して発言していく知識人として定義される「公共知識人 (public intellectual)」への関心が近年中国で高まっており、彼らには単にマスメディアの商業論

理に従って話す「メディア知識人」とは異なった役割が期待されている^四。知の独占と大衆迎合の双方を避けねばならないという板挟みの状態にあると言えるだろう。公共知識人の概念が中国で広まるようになったのは二〇〇〇年代以降のことだが、一九八〇年代に遡及的に適用するならば、『読書』の執筆者たちはまさに公共知識人であったということができる。その盛衰を分析することは、今後の可能性を再検討することにもつながっている。

公共知識人の概念を最初に提起したジェイコビーは、一九二〇年代生まれの「最後の知識人」の世代以降、高度な専門分化と大学の制度化に伴いアメリカでは公共知識人が消滅したと論じている^五。中国知識人史の研究者である許紀霖は、同じ現象が中国でも短期間のうちに再現されたとする^六。すなわち、一九八〇年代には知識人が公共的な存在であったが、一九九〇年代の専門化の進展によりその条件が消失したという分析である。許がハーバーマスの公共性論のアナロジーから

提示している「一九八〇年代の批判的公共性の成立→一九九〇年代の公共性の再封建化」という図式は、いささか単純化されてはいるが、本論文の枠組みと多くの部分で重なっている。本研究は『読書』をケーススタディーとして許の仮説を具体的に検証していく試みであると言ってもいい。

書評を中心に多様な評論を掲載する月刊誌『読書』は、現在もなお発行が続いている。その発行部数については断片的なデータしかないが、最も多い時期でも十数万部程度であり、巨大な市場を持つ中国では決して突出した規模とは言えないが、当時の知識人に与えた影響力は甚大なものであった。ある政治思想史研究者が言及するように、「一九八〇年代の文化ブームや新しい啓蒙運動を考察するとき、この雑誌ほど不可欠なメディアはない。ほぼ全ての思想界の動向にかかわったといってもいいぐらい、その存在感が大きかった」^七のである。

雑誌『読書』そのものについては、中国国内ですでに複数の研究があるが⁽⁶⁾、いずれにおいても雑誌の変遷は基本的に編集者の交代により説明され、前述したような時代背景の文脈を十分に踏まえたものであるとは言い難く、ここに本研究の新規性がある(第三章第四節)。

一 『読書』の誕生

(一) 『読書』創刊とその時代背景

創刊前年の一九七八年二月に開かれた中国共産党第十一期三中全会は、文革を精算し改革開放路線を決定した中国現代史の重要な節目であると一般にされる。文革中、知識人は吊るし上げの対象とされ、多くが「再教育」のために五・七幹部学校などに下放させられた。

『毛沢東語録』などの一部の本を除けば、書物は荒廃状態(「晝荒」)にあった。そのような暗黒時代からの脱却は、「知識人の再生」と称するに相応しいものであった

だろう――。

大まかな潮流としては上記のとおりだが、一九七九年は知識人たちにとつて挫折の年であったことにも目を向けなければならない。党和国家による社会統制が弱まった文革の末期から、若い知識人たちは小規模なサークルや「サロン」を形成して公的な議論や執筆活動を始めていた。そのような草の根からの知識人の胎動が一つの頂点に達したのが一九七八年秋から始まった「北京の春」とも称される民主化運動である⁽⁷⁾。北京・西単の「民主の壁」に壁新聞が張り出され、「民刊」と呼ばれる自主刊行物が北京だけで五〇誌以上発行された。鄧小平自身も華国鋒との権力闘争のために当初はこの動きを利用していたが、一九七九年三月一六日に「民主の名を借りて破壊活動を行う極端な民主化運動」と非難の演説を行い、弾圧に転じた。『読書』の創刊はその翌月である。知識人の再生とその挫折という文脈において初めて、同誌が持ったインパクトを理解できるだろう。

創刊前後の状況を、当事者の回顧録(二〇)やジャーナリズムにおける発言(二一)をもとに再現したい。『読書』の出版元である生活・読書・新知三聯書店(以下、「三聯書店」)は、一九四八年に生活書店、読書出版社、新知書店が合併してできたものである。この三社は一九三〇年代から一九四〇年代にかけて、『読書』の前身(03528)ともいべき雑誌を出版していた。一九三〇年代の『読書生活』一九四〇年代の『読書月報』『読書と出版』などである。国民党政府による幾多の発行停止を乗り越えつつ、「本を中心とする思想評論誌」の原型を形成した。『読書』創刊の立役者である「陳一范」、すなわち陳翰伯(一九一四—一九八八)、陳原(一九一八—二〇〇四)、范用(一九三二—二〇一〇)の三人は、遅くとも一九三〇年代末には出版業界におり、編集者あるいは読者としてこれらの雑誌に深く関わっている。范用の言葉を借りれば、「本を読むのが好きな一般人」を対象としたこれらの雑誌は「単純な書評雑誌ではなく、文化の問題や思想の問題について比較的広範に論

じており、読書の問題に限られていたわけではなかった。『読書』創刊にあたってこの特徴が想起されたことは言うまでもない。

文革が始まると、反知性的な社会状況の中で、他の多くの知識人と同じく「陳一范」もまた弾圧の対象となったが、彼らがそろって湖北省咸寧に下放されていた時に密かに温めていた雑誌の構想が『読書』につながった。一九七八年、三人がそれぞれ要職に復帰したことで雑誌創刊の条件が整い、具体的な準備作業が始まった。

創刊翌年の一九八〇年に編集部に入った沈昌文(一九三一—)が正式に編集長となるのは、陳原と范用が編集部を離れる一九八六年のことだが、それ以前から編集後記の執筆を担当するなど実質的に編集の中心を担った。また、編集の実務を担うスタッフとして、上山下郷運動の中で高等教育を受けることなく農村に下放されたいわゆる「知識青年(知青)」の世代も相次いで採用された。なかでも、董秀玉(一九四一—)、呉彬(生

年不明)、楊麗華(生年不明)、賈宝蘭(一九五五)、趙麗雅(一九五四)の五人の若い女性編集者は、「五輪の金花」と呼ばれて親しまれた。そのほとんどは小卒や中卒の学歴しか持たない上に、前職がトラック運転手やペンキ塗り職人などであり、范用は「太学院生が読む雑誌を高校生の5人が作った」と誇りにしていたという。

(二)「読書に禁区なし」をめぐる

創刊号に「創刊の辞」はないが、李洪林(一九二五—二〇一六)による巻頭記事、「読書に禁区なし」(91頁)は当時の思想界に計り知れない影響を与えた。「林彪」と「四人組」引用者注:文革を主導したとされる江青、張春橋、姚文元、王洪文」がのさばっていた十年間、一部の人たちがそうであったように、本もまた災禍を被る運命にあった」という一文から始まるこの文章は、本を徹底的に抹消しようとした文革期の空気を克明に描写している。そうであるからこそ、文革の終焉はまさに

「春の到来」であった。

一九七八年の春から夏に変わるころ、尋常ではない現象が発生した。寂れた本屋が、美味しい料理や流行のファッションの店をいきなり圧倒して、最も賑やかな市場となったのである。客の列が店内から店外まで、そして交差点まで、さらに曲がって別の道まで続いていた。(中略)あの長い隊列は、まさに精神の糧を歓迎する行列であった。

その上で李は、本の「禁区」がまだ完全には取り払われていないことを指摘し、読書の自由を高らかに謳った。本文をよく読めば「党の指導」が必要だとするなど周到な留保も付されていたが、やはりタイトルのインパクトは強烈であり、即座に賛否両論を巻き起こした。初版五万部が数日のうちに売り切れ、すぐに五万部増刷した一方で、本文を読まずにタイトルだけで批判する人も多く、范用も新聞出版総署に呼ばれて事情を聞

かれたという⁽¹¹⁾。創刊号には他に、多くの書籍が「内部発行」とされ一般に公開されていないことを批判した雨辰『内部書』を解放せよ^(79/189)なども掲載され、同様の文章は次号以降も続いた。

「読書には当然指導があるべきで、もし何もタブーがないなら、それはいいのでしょうか^(79/4156)」という投稿を皮切りに、こうした論調への批判をも紙面で積極的に紹介していった。一九七九年六月号にはプロレタリアート独裁の実現のために読書指導が必要だとする主張など、反論記事を三つまとめて掲載している。これらに対して次号の子起「読書は禁区なしであるべきだ」は、一つ一つ引用しながら丁寧に再反論した^(79/71925)。同記事には「この問題はすでに論争を引き起こしていますが、読者や作者が引き続き意見を發表することを歓迎します」という編集部のコメントが付記されており、それ以降も関連記事の掲載は続いた。同時期には、学問と政治の分離や言論の自由をめぐる論争も盛り上がっており、その中でも、学術領域において

マルクス主義が多くの思想の流派の一つでしかないという相当踏み込んだ主張も現れた^(80/128)。

このようなタブーにも挑戦していく議論の内容もさることながら、活発に意見を交わしていくコミュニケーションの有りにまずは着目したい。「本誌に發表される文章は、編集部視点で代表しているわけではありません。文責は自分で負ってください、どなたでも文章に対して異なる意見を發表することができます^(81/4)。『読書』が形成した公共性の要はまさにこの点にあった。

(三) 本と教養と三聯書店

『読書』は読書人が読書人に読ませるために作った雑誌である。読書人とは何か？読書人とは知識人のことである^(99/46)という陳原の言葉からも明らかのように、『読書』は「読書人」という読者像を意識した雑誌である。この節では、本というメディアと紐づけられた読書人＝知識人としての自己規定について詳細に検

討していく。

当時の中国語の知識人（「知識分子」という言葉は、学者や作家など特定の職業イメージと結びついた英語や日本語と異なり、「文字の読み書きができ、教育を受け、常識を理解している人」という程度のより広範な層を指すものであった^(79/4:131)）とはいえ、これでも当時の中国では相当に限られた層だ。一九八二年時点での識字率は六五・五%であり⁽¹¹⁾、非識字層がまだ相当数存在した。さらに、知識人を「中等専門学校以上の学歴」として定義した統計によれば、その総数は一九七八年時点で全人口の一・八%にあたる一七三六・七万人に過ぎなかった⁽¹²⁾。『読書』は「十億人の共通の言葉で冗談を言うことはしない」⁽¹³⁾のであった。

『読書』はなぜそのような大衆との差異化を意味しうるような自己規定をしたのか。差異化の基準としてあるのは知識や教養の有無であった。そもそも、「知識が多いほど反動的である」^(80/10:9)と言われた文革の間、「教養」（中国語で「修養」）は唯心主義であり修正主義

だとみなされ、まさに「禁区」であった^(79/4:28)。その時期を通過した改革開放期にあつて、「四つの現代化」に資するような実用的な知識が要請されたのは当然のことであるが、それに加えてすぐには役に立たない非実用的な知識にも目が向けられた^(81/8:29)。

そしてこのような教養への欲求と直接に結びついていたのが、「書荒」の状態が続く中での読書への渴望である。文革中は多くの本が内部発行とされ^(79/1:89)、『毛沢東語録』などごく一部の本のみが大量に流通していたために、出版点数は大きく抑えられていた。一九七〇年代末から状況が徐々に好転し始めるが、それでも当面は欲しい本が何でも手に入るという状況からは程遠かった。投書欄では、『読書』雑誌の紹介を見て、紹介されていた本を買いたいと思つても、往々にして思い通りになりません。（中略）これが私たちをとて苦しいです」^(80/10:156)などという悲痛な叫びがしばしば掲載された。

教養への欲求と本への愛は、『読書』の発行元である三聯書店のブランドイメージと結びつくことで三位一体が完成する。「もしある人が人文知識人に属しているか、知識人の精神を持ち合わせているかを見分けたければ、書齋の中にどれだけ三聯の蔵書があるかを数えさえすれば良い」^(二六)という言葉が象徴するように、二〇世紀末の中国の知識人にとって特殊な意味を持つ出版社であった。

三聯書店や『読書』と結びついたこの時期の知的風潮は、日本の岩波書店や『世界』と結びついた「教養主義」の議論になぞらえることもできるかもしれない。ただし、近代日本の教養主義が旧制高校などの学歴的特権集団としばしば結びついたことと比べると、『読書』の編集方針からは差異化と逆方向のベクトルもあることに気づかされる。小学校中退の範囲を筆頭に「学歴資本」を持ち合わせていない人も多かった編集部にあって、大衆との同化もまた重要な方向性であった。範囲は

のちに『南方人物週刊』の取材に対して「これ「引用者注：『読書』」の読者対象は、私は変える必要はないと思うのですが、本を読むのが好きで、学問をやっているのではない普通の人です」^(二七)と語っている。

専門学校にまでは進学している沈昌文は、『読書』の読者対象は中等程度あるいはそれ以上の知識人であり、私たちはまずこれらの読者の需要を考えなければなりません」^(二八)とより直截な表現を用いている。しかし、別の時期には『読書』は広範な大衆向けの雑誌」^(二九)であるとも記しており、そこに揺れを読み取ることもできる。実際のところ、沈は回顧録でこの編集方針をめぐる葛藤の記憶を書き残している。

思想評論をやるからには、学者に助けを求めざるを得ない。(中略)しかし『読書』は結局のところ学術刊行物ではない。「学問」の全てを私たちが引き受けることなんてできっこない。「学問」と関わりを持ちながら、学問のことだけを語っていることはでき

ない、なんとも厄介だ！(二八)

とりわけ八〇年代に新しい思想が大量に流入してくる中で、どのような読者を想定するかで編集部の内部でも喧々諤々の議論となった。最終的に、general reader Ⅱ「相当の文化教養を持った一般読者」を想定すべきだとする言語学者の呂叔湘の発言がヒントとなって方針が定まっていた^(二九)。すなわち、「エリート文化」に敬意を抱きつつ、決して「エリート文化」には属さない、そのような絶妙なバランスが『読書』の立ち位置となったのである。

もし『読書』の性質を別の一つの名詞で表すなら、無理やりではありますが「橋渡しの文化」と言ってもいいかもしれません。すなわち、人々がこれを通して「エリート文化」という対岸に到達できるかもしれないが、これ自身は「対岸」ではないのです。

(87/4:160)

沈昌文の言葉を借りれば、「どっちつかず」(86/4:160)なこの性格こそが、『読書』が体現した読書人的公共性の基礎にあつたのであろう。そして、こうした編集方針については先行研究でも既に十分に論じられてきたものであるが、思想的・一貫性を強調するあまり、そこに至る葛藤は捨象されがちであつた。試行錯誤の末にたどり着いた脆いバランスであつたことは改めて強調しておきたい。そして次章第三節の内容の先取りにはなるが、この編集方針が言語化されるようになったのは、その実現が危うくなつていた時期のことであるという逆説も見逃すべきではない。

(四)「読者・作者・編者」の共同体

「読者・作者・編者」というのは一九七九年から一九九三年までほぼ常設されていた投書欄の名称である。ここでは高名な文化人であらうと無名の読者であらう

と、区別されることなく掲載される。「読者・作者・編者」の欄を、本物の「民主論壇」にしなければならぬ」「⁽¹⁰⁾という創刊者たちの思いの表れだろう。

このように「平等に人に接する」(811:3)というのはしばしば指摘される初期『読書』のスタイルであり、「すべきだ」という言葉を原稿の中で使ったら、同僚に「読者に何かを『すべきだ』と教える権利はない」とたしなめられたという印象的なエピソードを沈昌文が書き残している(861:160)。前節で示した読書人としての自己規定は、雑誌を作る側である「作者・編者」だけでなく、受け手である読者にも共有されたものである。そうであるからこそ、第二節でみた活発な公共性の空間は、三者を横断する想像の共同体に広がっていた。

こうした水平的コミュニケーション特性が非常にユニークな形で現れた事例を一つ紹介したい。言語学者の呂叔湘が「誤字についての小論」(822:96-101)で、『読書』に限らず様々なメディアに見られる誤字を指摘し、誤字に気づいたら投書するよう読者に呼びかけたこと

を契機に、投書欄を中心に誤字の指摘が相次ぐようになった。編集部は「呂叔湘同志が本誌で度々誤字を消滅しようと提起して以降、私たちは毎号多くの読者から誤りを指摘する手紙を受け取り、大いに助かっていました」(827:15)と応答している。「業務を改善し、質を高めるために、私たちの業務についてのあなたの意見を切に希望します」(8011:99)という編集部の求めに読者は真摯に応じ、共同的な参加感覚が生じていたのではなからうか。

もちろん単に読者として投書をするのみならず、読者が作者へと変わることもあり、経済学者の梁小民は北京大学の院生時代に原稿が採用されたことを後に回想している⁽¹¹⁾。もともと、原稿が却下される割合は国内の雑誌の中で有数に高く、「多くの作者がこのために『騙された』」(994:106)とあるように、平等な参加可能性は多分に想像上のものではあったのだが、それでも少なからぬ読者が掲載に希望を抱いていた。

二 「文化熱」の時代

第一章では、両義的な読者設定に立脚しつつ双方向的なコミュニケーションを志向した読書人的公共性の成立の過程を確認してきた。第2章で取り上げるのは、そのような公共性の特質が全面的に開花して、『読書』が「全盛期」を迎えた一九八〇年代中期の歴史である。

この時代はしかし同時に、後に続く雑誌の性格変容の前兆をも孕んでいた。

(一) 政治気候と『読書』

『読書』の全盛期に先立つ出来事は、その終わりを予期するものでもあったのかもしれない。「政治気候」の悪化は読書人的公共性にとっての最大の脅威の一つであった。一九七九年の創刊号での衝撃的な宣言「読書に禁区分なし」を巡る論争でも、政治的圧力がなかったわけではないが、この時はかろうじて回避することができた。しかし、一九八〇年代に入って共産党内の保守派の

発言力が徐々に強くなるにつれ、より厳しい状況に置かれることになる。一九八三年十月に公式に発動された外国文化の流入に対する批判キャンペーン、「精神汚染反対運動」で政治の左傾化はピークに達した。このような状況下で、『読書』の停刊を求める声が各所から伝わってきた⁽¹¹⁰⁾。

最終的には、当時中央政治局委員として精神汚染反対運動も主導していた保守派のイデオログ、胡喬木の擁護もあり、最悪の事態は免れた。しかし、沈昌文に取材した『南風窓』の記事によれば、「マルクス主義の世界観と毛沢東思想の指導を強化しなければいけない」という胡の発言を受け、「それ以降『読書』は「マルクス主義の世界観と毛沢東思想の指導」をすぐに強化し、ブルジョア思想の紹介を減らし、一八、一九世紀の革命の出来事を学術研究の方法でより多く伝え、また「プロイセンの最新の検閲訓令に対する見解」などマルクス主義の古典を論じて、読者に自ら考えてもらうことを狙った」という⁽¹¹¹⁾。

実際、当時の『読書』を読み進めれば、その変化を見て取ることは容易である。創刊当初の自由や民主を称揚するような文章は鳴りを潜め、一九八三年頃の主要記事にはほぼ毎月マルクス主義や共産党関連の文献の紹介が含まれる。編集後記でも党の方針に従うことを強調する周到な予防線を張るようになった。

極めつけは一九八四年一月号の巻頭記事「読書活動と出版工作を展開する」である。中央宣伝部出版局局長の許力以へのインタビュー記事であり、精神汚染反対運動およびそれに連動して展開していた振興中華読書活動が話題の中心となっている。許によれば、振興中華読書活動には工場で働く青年を中心に千百万人以上が参加し、各省や市の党委員会宣伝部の指導の下に結成された読書指導委員会から本の選択の助言を受けた。良書として例示されているのは陳漢楚『社会主義史話』などであり、他方でマルクス主義に反する書物や低俗なSF小説などは危険だとして排斥した。「読書に禁区なし」の方針からは遠く離れてしまったように見える。

とはいえ、保守派においてもなお、読書の重要性は認知されていたことも同時に注目したい(四)。

(二) 文化の「窓口」

経済改革の停滞に波及することを恐れた鄧小平や胡耀邦、趙紫陽らの差し金により、精神汚染反対運動は一九八三年末から遅くとも一九八四年初めごろまでには収束した。著名な雑誌編集者である朱偉は一九八四年から一九八七年にかけての時期を「氣勢盛んに西洋文化を取り入れた」『読書』の第二段階として位置付けている(五)。西洋由来の人文社会科学の知識を輸入しつつ、中国の近代化のための文化的条件を探ろうとする当時の思想的な一大ムーブメントは、一般に「文化熱」と呼ばれている。先行研究によれば、この「文化熱」の時期の多様な思想の流入により党の正統イデオロギーが揺らいだことが、後の天安門事件につながった要因の一つとなった(六)。こうした思潮の中で、「中国の内外をつなぐ窓口」(855:156)たらんとした『読書』はその地位

を確かなものとしたのである。

年末に掲載される総目録によれば、プラトンやカント、ルソーなどの古典に加え、ハイデガーやサルトル、シュンペーターなど二〇世紀人文社会科学の大家の著作もこの時期に紹介されている。ただ、同時代の著作については、フリードマンやトフラーなどはあるものの、何よりも当時世界を席巻していたポストモダン思想が本格的に紹介されるのは一九九〇年代を待たねばならない——「ポストモダン」を語るよりもまず、近代化が先決の課題とされたのである。

ところで出版史の視点に立つと、「文化熱」は「叢書熱」と連動していたというのも重要な事実である。国内外の名著や最新の著作をシリーズで刊行する叢書が相次いで企画され、人気を博した。中でも影響力が大きかったのは『未来に向けて（走向未来）』叢書であり、それとしばしば並び称されたのが、北京大学の教員を中心に設立され、各界の気鋭の研究者を集めて講座を開

くとともに出版活動も手がけた中国文化書院、そして同じく雑誌や翻訳書の一連の出版を手掛けた『文化：中国と世界』である。最終的に中国文化書院のみが天安門事件後の出版統制を生き残ったことから象徴的に読み取れるように、この三者に集まった知識人の集団は、互いに思想的傾向にも政府との距離の取り方にも違いが表れていた。そのために、これらは文化的派閥として中国現代思想史の整理においてしばしば用いられる（二七）。

ただ、思想的な分断が顕著になった一九九〇年代以降と比較するとき（第三章第四節）、この時代はまだ相互に立場の違いを超えて議論を交わすメディアがあり、『読書』はその代表的なものであった^{二八}。例えば、『未来に向けて』叢書の編集長である包遵信は『読書』編集部の一員でもあり、彼を含めた叢書編集委員会の成員二十八人のうち十一人が計四五点の記事を『読書』に寄稿している（一九七九年から一九八九年の間）。中国文化書院についても、講師陣三十三人のうち十六人が計一〇

二点の記事を『読書』に寄せている(同期間)。さらに、『文化・中国と世界』は出版元が『読書』と同じ三聯書店であり、編集委員会の成員二〇人中二二人が計二二七点の記事を『読書』に載せていた(同期間) 二五。

(三) 読者層の両極分解

「文化熱」を許容した「政治気候」はやがて変容する。一九八六年十二月、選挙制度改革を求めて中国科学技術大学で発生した学生デモが全国に波及し、それに断固とした態度を取らなかったことで胡耀邦総書記は保守派からの攻撃にさらされた。最終的に胡は一九八七年一月一六日の中央政治局拡大会議で辞任に追い込まれる。一九八〇年代の「思想解放」を主導し、「民主派知識人」と人的ネットワークを形成していた胡の失脚により、「ブルジョア自由化」への批判が再び本格化した。かくして、「今や中国の『文化熱』は既に『文化冷』となった」(881:106)のである。

先にも引用した朱偉は、一九八七年からの『読書』の

「第三段階」を次のように論じている。

この時期の『読書』は、もはや耳目を集めることができなくなりつつあった中で、自らの空間を作り出していたように見える。伝統的な学問に近づき、現実からは離れていったようだ。(中略)『読書』の第一段階「引用者注…一九七九年から一九八四年」、第二段階「引用者注…一九八四年から一九八七年」からここまで至ったというのは、まるで春と夏を通り抜け、秋がやってきたみたいなものだ^{二〇〇}。

ただし、誌面から判断する限り、精神汚染反対運動のときほどのわかりやすい変化はないように見える。むしろ、この「夏」から「秋」への移行は連続性において捉えるべきかもしれない。「文化熱」の時期、最新の思想の輸入と軌を一にして、創刊当初にあった読書をする人すべてが共感するようなエッセイや、一つの記事を起点に次々と発展していく論争が少なくなった。実

際、既に一九八六年の編集後記で「文章にわかりやすさが足りず、内容の豊富さも足りず、形式にも生き生きとした感じが足りない」「創刊当初「読書に禁区なし」を載せた時の勢いはどこに行つたのか」という読者の意見を紹介している(87/10:160)。

『読書』の「全盛期」を築いた進取の気性そのものが、『読書』から読者を引き離す要因になったのであるとすれば、下記の編集後記を書いていた時の沈昌文の心情は推して知るべしである。

『読書』の八年間の道のりを振り返ると、文章はだんだん長くなってきました。先月号で私たちは『読書』の「姿勢」について話しました。ある人から読後にこのような感想をもらいました。「貴誌は一九七九八〇、八一年にはまだ「寝転んで読む」ことができましたが、それ以降は本当に難しくなりました。」

(87/10:160)

とはいえこれらのことは、読者の全てが離れていったことを示すものでは当然ながらなく、むしろ読者層の両極分解とでもいふべき状況が生じていた。「わかりにくい」という読者からの声を気に病んでいたのである、一九八七年前後の編集後記には、第一章第三節で紹介した「橋渡しの文化」などの編集方針の説明が度々登場する。それに対して熱狂的な読者はこう嘯み付いた。

近頃の『読書』の「編集後記」引用者注：「編集後記」

には、よからぬ感情が表れています。非常に感傷的なのです！みんなに理解されておらず、他の人の理解を何としても得たいという卑屈な心理が大いに見受けられます。(中略)「我が道を行け、人には好き勝手言わせればいい！」信じてください、堂々たる人口十億の大国です、必ずあなた方の理解者がいます。

(88/2:3)

この過激な投稿には、「わかりやすさ」派の読者が反発したことは言うまでもない。

「貴族化」の傾向にある評論をなくし、もう少し庶民的な色彩になることを望んでいます。(中略)決して「我が道を行け」に満足することなく、虚心に様々な意見やアドバイスを聞いて初めて、展開があり、革新があり、より見どころや魅力のある雑誌を作ることができます。(8853)

三 天安門事件を超えて

第三章の主題となるのは一九八〇年代末から現代にかけての『読書』の全面的な変容である。第二章で触れたように一九八〇年代から断片的に出現していた変化の兆しは、天安門事件と相前後して本格化する。もともと、この変化は単に政治的要因のみによるのではなく、複合的な要素が絡み合っていた。

(一) 商品経済化の波

天安門事件の前年の一九八八年、経済政策の不備など諸々の要因が相まって、前年比一八・五％に達する物価の急上昇と不景気が組み合わさったスタグフレーション状態となり、国民の強い不満が高まっていた^(三三)。改革開放政策の開始から十年、市場経済の負の側面の表出とも言えるこの事態は、知識人にとっての挑戦でもあった。

一九八八年九月号は知識人の現状を問う記事四本を掲載し、「少なからぬ反響」(8812:60)を呼んだ。巻頭の許紀霖「商品経済と知識人の生存危機」(8895-11)は、市場価値の創出に直接つながる知識を持った技術者など実務の専門家はともかく、抽象的な概念の操作を専らとする人文科学や社会科学などに従事する知識人は、商品経済の社会において居場所がないことを指摘する。非実用的な知を重んじる知識人＝読書人にとって、「文化の低迷」(8812:7)は看過できる事態ではない。同月号

の編集後記も、「商品経済が発展している昨今の情勢のもとで、中国の知識人はまさにある種の「生みの苦しみ」を経験している」(889:160)として、文革期の苦難までも引き合いに出しながら強い危機感を露わにした。

『読書』自体も一九八八年前後には慢性的な赤字状態が続き、度重なる値上げを余儀なくされた。

『読書』はこの十年近くで、定価を二回以上あげましたが(〇・三七元→一・八〇元、中国知識層は「体脳倒挂」[引用者注:頭脳労働者の収入が肉体労働者より少ないという社会現象]の状態にあり、一般に収入がそれに伴って増加するわけではありません。このことを考えると、『読書』を購読している読者は全て、自らの物質生活を犠牲にしているということになります。深く皆さんの好意を理解し、ここに特に感謝いたします！(8811:160)

しかしそれでもなお『読書』の赤字は解消しなかった

し(896:160)、読者の側も「自らの物質生活を犠牲」にする人ばかりではなかった。一九八九年二月の編集後記は長年購読していたという老教授に対して投げかけた妻の問いかけを紹介している。

「あなたは体がこんなに弱くて、いつも豚レバーを食べなければいけません。今は雑誌が値上がりしています。私たちには一つの選択しかありません。豚レバーを食べますか、それとも雑誌を購読しますか？」結果、教授は豚レバーを食べ、『読書』を諦めることを選択せざるをえませんでした。(892:160)

『読書』を捨て、豚レバーを取った読者はその老教授一人にとどまらない。同じ記事によれば、同年に購読者数の五分の一を失ったという。

(二) 天安門事件

「文化熱」が一九八七年一月の胡耀邦総書記失脚に

端を発する「ブルジョア自由化」への反対キャンペーンで終息に向かったことは第二章第三節で述べたが、趙紫陽総書記のリーダーシップのもと、一九八七年一〇月の第十三回党大会で「政治体制改革総体設想」が採択され、再び政治体制改革の機運が高まった。政治体制改革を巡る論争は趙紫陽ブレーンによる内部の検討に留まらず、『光明日報』や『世界経済導報』などの新聞、『政治学研究』などの学術誌、その他多くの新興誌に波及した⁽¹¹⁾。天安門事件後に国外亡命することになる筆者の手による鄭永年「二十世紀政治民主主義思潮・競争モデル」(88「7」)を掲載するなど、『読書』もその流れにある程度共鳴していた。ただし、「文化熱」の中で『読書』が自他ともに認める中心的役割を果たしたことに比べれば、政治体制改革論争へのコミットはさほど全面的なものとは言いがたい。思想界全体が政治化していく中で、文学や歴史、哲学を中心とする雑誌の構成は変わらなかった。

『読書』は学術・時論雑誌ではありません。本を中

心として、本をめぐる話をします」(86「12」:154)。このような方針に対して、読者から『読書』の編者、作者、読者たち、書斎から出て、もつと現実のことを気にかけてらるのですか！(88「7」という呼びかけもあったが、あくまで『読書』が現実を気にかけるようにと読者は要求します。これは全くもって正当なことです。しかし『読書』はやはり政論誌ではありません」(89「1」:16)という立場を維持し続けた。この冷めたバランス感覚はさまざまに評価できようが、結果論から言えば、天安門事件後これにより『読書』は助けられることになる。

一九八九年四月一五日の胡耀邦の死去が、学生を中心とした民主化運動の直接の引き金となった。『読書』の誌面にはそれに関する記述はほとんど見当たらないが、運動で主張されている内容自体には多少の同情の念はあったのかもしれない。沈昌文は天安門事件発生直前に発行されたとみられる六月号の編集後記の最後を、「今月号を編集している時、いたるところで人の声

が沸き立っています。どうやら、人々はもう「自然の成

り行きに任せる」ことは難しくなってしまったようです」(89/6:160)と結んでいる。

そして、六月四日、人民解放軍が天安門広場に入り、学生運動を武力で鎮圧した。七月号は発行されず、八月号との合併号となった。その間、検閲を通過するために非常に慎重深い手続きが取られていたことが、当時編集部にいた趙麗雅の公刊された日記を読むとわかる(111)。

合併号の巻頭記事は陳晋「周恩來の完璧な人格：『周恩來伝』読後」(89/7+8:5-13)であり、さらに「マルクス・レーニンの著作を研究したいという読者の需要に応えるため、『マルクス・レーニン著作学習』コラムを特設」(89/7+8:288)している。編集後記には次のようにある。

中国には安定が必要です。本誌第二期(二一ページ)、第五期(四五ページ)で度々指摘しているように、動乱は中国の現代化が必要としているものではなく、国家と人民に苦難と損失を与えるのみです。今

後より一層、『読書』が発刊の方針をしつかりさせて、マルクス主義を指導として、これ以降の各号が新しい様相となることができるよう望んでいます。

(89/7+8:288)

当然「政治氣候」の制約から、それ以外のことは書きようがないという事情はあったのだろう。少なくとも天安門事件発生の前には、学生運動に同情的とも取りうる文言を書き記していたのである。ただそれまでの経緯を考えると、「中国には安定が必要です」というのが全く意に反した言葉であるとも考えにくい。文革期の混乱が原体験としてある『読書』にとつて、平穏に読書できる環境さえあれば、それ以上は求めないし、余計なものだということのも本音なのではないか。

佐藤卓己は一九八九年の「東欧革命」を市民的公共性の発現とする一般的な議論を批判し、街頭の公共性における大衆行動の所産とみなしてファシスト的公共性との連続性を指摘した^{三四}。筆者自身は、形式的同質性

のみをもって当時の民主化運動と文革を同列に論じることが避けるべきであると考えている。ただ、仮に佐藤と同様の立場を取ったとしても、読書人的公共性としての『読書』が街頭の公共性と距離を置くことで自律性を保ったという評価は難しいだろう。結局のところ公的なイデオロギーを擁護する言説を再生産することにより、批判性を喪失し国家権力との距離を無化する方策でしかなかったためである。

しかしこのときに批判性を発揮しなかったからこそ誌上の言論空間が維持されたというのも事実の一面ではある。一九八九年から翌年にかけて、雑誌のタイトル数は六〇七八点から五七五一点へと五・四％減少している^{三二五}。それまではずっと上昇傾向にあったのだから、減少幅の大部分は、統制強化に起因するものだとみていいだろう。政治的な冬の季節が始まっていた。そしてその中で『読書』は生き残り続けた。

(三) 第二次文化熱？

天安門事件の翌年以降、雑誌の低迷を覚悟した編集部の方の予想を裏切り^{三二六}、定期購読者数は継続的に増えていった。「文化熱」の担い手となった他の雑誌が停刊となる中で、国外知識を紹介する唯一の拠点としての存在感をむしろ増したのである^{三二七}。一九九五年の元日にはついに次のような記事が『人民日報』に現れた。

一九九五年一月号の『読書』雑誌の部数が「引用者注：前年の四・九万部から」八万部に達した。(中略)

商業の波が起こった当初は、社会心理がどちらかと言えば浮ついていて、学術文化は冷遇されていたが、市場システムが形成され整備されるにつれて、必然的に知識の価値を重く見積もる必要が出るのである。八〇年代中期以来の第二次文化熱が到来しようとしている^{三二八}。

もつとも、現在において一九九〇年代を「第二次文化

熱の時代として振り返ることはまずないし、本当に商品経済化が今度は知識界の追い風となったのかも疑わしい。購読部数の増加と裏腹に、『読書』編集部による文章のトーンは思いのほか暗い。一九九一年には「読者へのお知らせ」としてこのように伝えた。

『読書』の一九九一年の購読者数は、昨年と比べて二〇%上昇しました。(中略) 購読者数の増加は、必ずしも良いこととはならない時があります。(中略) 万一、紙の価格や印刷費用が高騰しても、読者は既に定額を払っているので定価を上げることはできず、そこで購読者数が増えるほど、損失が大きくなるのです。(912:159)

最終的には事なきを得たが、この時期に停刊さえ検討しており、『読書』の固定的な愛読者にとっては不安の種となった。

説明しなければならないのは、私たちは今のところ停刊しようとは当然考えていませんが、その一方で万一停刊するときの心の準備はしているということです。(中略) 停刊の心の準備をしているというのは、経済競争の雰囲気の中で、自らの生存能力は一艘の小舟のように有限であり、この本の海の中で十数年間何とかかんとか持ちこたえてきたとはいえ、所詮は実力を欠いた小さないかだにすぎず、少し気を抜けば簡単に転覆してしまうからです。(918:159)

(四) 汪暉の時代へ

一九九六年五月から、編集長が沈昌文から汪暉(一九五九-)に交代した。魯迅研究から始め、後に思想史に転じた汪は、「新左派」の旗手として知られている。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)で社会学の博士号を取った黄平(一九五八-)も翌年編集長に加わり、この新たな双頭体制が二〇〇七年まで続いた。

それまでの「沈昌文時代」を「汪暉時代」と対比させて語るのが、先行研究やジャーナリズムにおける一般的なフレームワークである。しかし、確かにそれらで指摘されているような傾向性は否定できないものの、編集長の違いだけから来る差というよりも、一九八〇年代から芽吹き始めていた種が、社会全体の変化の中で一九九〇年代後半になって全面化したものだというべきである。

しばしば指摘される変化の一つは、人文科学及び社会科学の学術研究者としてのバックグラウンドを持つ二人の下で、雑誌の「学術化」により難解になったというものである。これは単に外部から言われているだけでなく、創刊当初の『読書』の中心にいた范用さえ、編集長が変わるにつれて「内容はだんだん高度になり、文章は長く難しくなりました。私は読んでもわからないし、たいして読みたいとも思わなくなってしまうました」^(三九)という辛辣な批判を行っている。

確かに、汪や黄が「社会問題や国際問題についての議論と社会科学の各領域からの作者が雑誌の中で顕著に増加した」^(四〇)と自ら認めているように、人文主義的な色彩を薄め、「三農問題」やグローバル化などの現実的な問題への関心を強める転換が自覚的に行われたのは事実である。それに伴い、人文系以外からも社会科学の様々な分野の研究者が多く執筆陣に加わったが、そのこと自体は雑誌が学術化して難解になったことに本来直結しないはずだ。

そもそも、専門的な内容を含んで難しいというだけのことならば、それは既に一九八〇年代の「文化熱」の時代から指摘され始めたことだ（第二章第三節）。もちろん、沈昌文が目指していたのは学問を利用しつつも気軽に読めるようにするという「どっちつかず」なポジションであったが（第一章第三節）、学問の発展に伴ってそのバランスを維持するのは難しくなる。

ただし、一九八〇年代から変わった点があるとすれば、それは学問の専門化・細分化が本格的なものとなった

ったということである。中国では文革の間長らく大学の学生募集が停止され、多くの文系の学問の研究も禁止されていた。そのため、初期の『読書』の作者の中心であるような老年世代の知識人たちは、特定の学問分野の専門家よりも、読書を通じて幅広い教養を身に着けたというタイプが多い。しかし、一九七〇年代末に大学の学生募集が再開され、禁止されていた学問も復活する。一九九〇年代にはそのような正規の高等教育を受けた大学所属の研究者が知識人の中心となった。

専門家ではなく「雑家」を自認し、創刊当初から実に一二三点の記事を寄稿した金克木（一九二二—二〇〇〇）の死は、一つの時代の終わりを象徴した。『読書』時代の精霊」と題された陳平原による追悼文は次のように締めくくられている。

今日の中国において学界の気風は変わりつつあり、あるいは既に変わってしまったていて、専門化が主流となった。金さんのように博學深思で、「専門家の学」

を基礎とした「雑家」のこと、彼が『読書』雑誌に発表した生気潑刺、活氣横溢な「どっちつかずな文章」のことを、これからの読書人は永遠に偲ぶことになるだろうと信じている。（001223）

さて、「汪暉時代」の第二の特徴とされるのは、雑誌の左傾化である——社会主義国の中国では、左派が保守的で右派（自由主義）が革新的というねじれがあることに注意。誌面が新左派に独占され、自由主義派が排斥されたという見方であるが、これは第一の変化に増して疑わしい。少なくとも、編集後記では「社会が急速に分断されている状況」（008:159）であると現状分析しつつ、「異なる声が発せられる場所」（984:158）としての『読書』の役割をたびたび強調している。

汪は『読書』から退任したのち、誌面に登場した左右両派にまたがる経済学者の名前を列挙しつつ、次のように主張した。

私たちを攻撃してきたグループの知識人の刊行物やメディアの中に、こんなにも広範で異なる意見があったでしょうか？『読書』雑誌の作者と学科の範囲は過去十年の間に大きく広がり、検討した文章について、一定の質に達してさえいれば、私たちは必ず発表しました（四一）。

しかし仮に『読書』自体が本当に変化していなかったのだとしても、そのようにみなされる状況になったというのは確実なことだ。天安門事件以後の中国における思想は、左右の対立を筆頭に、分断の時代として特徴づけられる。雑誌の読者層も思想の分断と連動して細分化されたものとなる。これを公共性の構造転換として描写するならば、序章でも紹介した許紀霖の次の表現が的確だろう。

九〇年代末には、統一した公共知識界は跡形もなくなり、公共文化生活には深刻な断裂が発生してい

た。八〇年代のような真剣な公共的討論や一致した公共的テーマはなくなった。公共雑誌にも知識人層にも、再封建化の構造が生じることとなった（四二）。

（五）ポスト活字時代の知識人

文革の暗黒期を経て、本⇨教養⇨知識人⇨読書人が復権するところからこの論文の記述を始めた。メディア環境が急速に変わっていく中で、彼らがたどることになった道筋を見通すことを最後の課題とした。中国では既に一九五八年からテレビ放送が始まっていたものの、政治的混乱などにより普及は大幅に遅れ、本格的に浸透し始めるのは一九八〇年代のことだ。やがてテレビが国民的メディアとしての地位を確固たるものとしたが、その座はすぐにインターネットに奪われることになった。

それでは、本というメディアを抛り所とする知識人

「読書人は、この流れをどう見ていたのか。実は意外なことに、早くも一九八四年にはポスト活字時代を予言する記事が掲載される。

聞くところによると、書籍は今まさに革命の前夜だという。爪の大きさのシリコンチップに何十万字の本が収容でき、数枚のディスクに百科事典を全て保存できる。(中略)どのみち本は知識の貯蔵庫であり、知識を得ようとすれば、本はやはり読む必要はあるだろうが、読み方は古いやり方とは異なってくる。

(84:47)

媒体は紙でなくなるかもしれないが、本の必要性は減じないというのが当時の論者の大方に共有されていた見方である。現時点から読み返しても、確かに全く的外れなものではない。しかし、「メディアとはメッセージである」(マクルーハン)とするならば、媒体の変容がもたらす意味合いにまで考察が及ばなければ、いさ

さか物足りない。その意味で、真に優れて予言的なメディア論と言えるのは、『データ複製時代の知識人の運命』と題された厳鋒による一九九七年の記事である。

もしも『読書』が紙の形式で出現することがなければ、知識人もまた今日のような姿を見せることは決してなかっただろう。有限の紙の資源に、普及が難しい印刷技術と独占的な発行経路によって、文筆の特権的な地位が保証され、知識人の特権的な地位もまた保障されていたのである。(中略)しかし、自分の名前と文章が Internet に載ったからと言って喜んだとすればおかしい人である。(971:19)

もちろん、新たなメディアが出現するとき、古いメディアが完全に消滅するわけではなく、全体のメディア・システムの中で細分化された対象に向けて機能を特化することになる^(四)。

伝統メディアは依然として成長しており、例えばますます多くの雑誌が世に出ている。しかし、雑誌の成長は主に細分化した読者市場に向けた新タイトルによっているのであり、総合誌の読者層が広がったのではない。総合誌の発行部数には明白な増加が一貫して見られず、例えば『新聞週刊』は一九七八年の発行部数の三〇〇万部に対して、一九九八年は三二〇万部に過ぎない。『生活』雑誌は既に停刊を発表して、ネットに力点を置くことにした。(02/2:40)

『読書』の読者層の転換も、このメディア論的文脈において捉えるべきである。

おわりに

ファシスト的公共性Ⅱラジオ人的公共性が席卷した文革の終結後、いかにして市民的公共性Ⅱ読書人的公共性が再建され、そして変容したのかという問題設定

のもとで、当時の知識人社会の象徴的なメディアである『読書』の一九八〇年代を中心とする歴史を追ってきた。非常に大まかな方向性としては、大衆でもエリートでもないという「どっちつかず」な自己規定を基礎に、本と教養を結節点とした相互コミュニケーションを特色とする想像の雑誌共同体が、徐々に高踏化するとともに思想的にも分断され、当初の活気を失っていった過程と言える。当然、当初の理想がそのまま実現したわけでもない上に、変容の過程も行きつ戻りつしたものであったし、さらにその変容を指摘する言説そのものにもイメーজ先行の部分があることは、慎重に言及してきたつもりである。

雑誌の変容の背景には多様な要因があった。単に編集長が交代しただけではなく、天安門事件などの政治的統制、商品経済化、大学の制度化に伴う学問の専門化や、イデオロギー的分断などである。そして本論文はメディア史として、メディア環境の変動にも注意を払ってきた。技術決定論を取るわけではないが、本の封鎖か

ら解放、そしてテレビやネットの登場による本の周縁化という流れは知識人の命運と密接に結びついているし、控えめに言っても上述の変化を見事に象徴するものである。

これらの諸要素は相互に密に関連するものであるが、「下部構造」としての単一の基礎があるわけではない。ただ敢えて指摘するならば、いずれも文革の終焉という同一の時点を起点とするものだ。徹底的な破壊の時代があつたからこそ、その反動としての教養への憧れがあり、シンボルとしての本を結節点とした雑誌共同体が想像しえた。大学が再開したばかりの時期にあつて、海外から学ぶことでそれまでの遅れを取り戻し、近代化を実現するという共通の目標が知識人にはあつた。中国の知識人社会にとって一九八〇年代とは、いわば危機を経ることによって立ち現れたユートピアだった

(一) 『読書』からの引用については、発行年と号(期)数、及びページ数のみを略記する。中国語資料の日本語訳は筆者が行った。

(二) 例えは、佐藤卓己『輿論と世論―日本の民意の系譜』(新潮社、二〇

のである。文革に匹敵する政治的暴力の発動をまざまざと見せつけた一九八九年の天安門事件と相前後して、知識人は制度化された大学に閉じこもって細分化された学問に従事し、イデオロギー的にも分断していくようになった。改革開放の負の側面の顕在化は、知識人の苦境に拍車をかけた。そしてまた、すでに古いメディアであつた本の復権が長続きするはずもなく、すぐにテレビの急速な普及に追い抜かれ、さらにインターネットに取って代わられた。

かくして、『読書』の時代が終わった。言い換えれば、民国期を知り、文革を経験した世代の知識人によってつくられた特異な時代的産物は、その歴史的使命を終えたのである。

〇八年、同『ファシスト的公共性―総力戦体制のメディア学』(岩波書店、二〇一八年)などを参照。

(三) 例えは、Timothy Cheek, *The Intellectual in Modern Chinese History*,

Cambridge: Cambridge University Press 2015.

㉔ 張建國「二公共知識分子」与媒介知識分子『新聞界』二〇〇七年第一期 四五一—四六頁。

㉕ Russell Jacoby, *The Last Intellectuals: American Culture in the Age of Academe*, New York: The Noonday Press 1989.

㉖ 許紀霖「公共知識分子如何可能」『中國知識分子論』復旦大學出版社、二〇〇四年、三四—七八頁。

㉗ 王前「中國が読んだ現代思想—サルトルからデリダ、シュミットからロールズまで」講談社、二〇一二年、一三頁。

㉘ 例えは、金炳亮「『讀書』編輯の三個命題」『中國編輯』二〇〇五年第四期 七一—七三頁、陳昆鵬「『讀書』的編輯特色探析」『東南傳播』二〇一〇年第五期 六七—六九頁、張楠「『讀書』雜誌的編輯思想及其意義」『新聞愛好者』二〇一二年第一期、六九—七〇頁、龐海音「從廢蒙看到批判者—『讀書』雜誌作者群體分析」『出版科學』二〇一六年第五期 七八—八二頁。

㉙ Gu Xin, "Plural Institutionalism and the Emergence of Intellectual Public Spaces in Contemporary China: Four Relational Patterns and Four Organizational Forms," *Journal of Contemporary China*, vol. 7, no. 18, 1998, p. 275.

㉚ 沈昌文「閨樓人語」『讀書』的知識分子記憶（作家出版社、二〇〇三年、沈昌文・張冠生『知道—沈昌文口述自傳』花城出版社、二〇〇八年）。

㉛ 范用「『讀書』三百期」『文匯讀書週報』二〇〇四年一月一十六日 (<http://www.china.com.cn/chinese/RS/705377.htm>); 二〇一七年一月八日閱覽、高任飛「范用：給普通人辦『讀書』」『南方人物週刊』二〇〇七年第一期 一七一—一八頁など。

㉜ 前掲、高「范用—給普通人辦『讀書』」。范用給人民出版社立了軍令狀辦『讀書』雜誌『南方都市報』（電子版、二〇一〇年九月一五日）

(http://book.iteg.com/culture/3/detail_2010_09/15/2517717_0.shtml); 二〇一七

年二月八日閱覽。

㉝ 世界銀行ホームページ

(<http://data.worldbank.org/indicator/SE.ADTLITR.ZS>); 二〇一七年六月二三日閱覽。

㉞ 韓並光「中國知識分子的数量規模、素質結構和社会流動」『新視野』二〇〇五年第一期、五五頁。

㉟ 前掲、沈「閨樓人語」二二頁。

㊱ 許紀霖「文化品牌是最大的財富」生活・讀書・新知三聯書店『我與三聯生活・讀書・新知三聯書店成立六十周年紀念集一九四八—二〇〇八』生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇八年、一七〇頁。

㊲ 前掲、高「范用—給普通人辦『讀書』」。

㊳ 前掲、沈「閨樓人語」二〇—二二頁。

㊴ 董芳玉「在理想与现实之間」前掲、生活・讀書・新知三聯書店『我與三聯』二八五頁。

㊵ 梁小民「三聯是我的良師益友」前掲、生活・讀書・新知三聯書店『我與三聯』七二—八〇頁。

㊶ 李青「『讀書無絲区』」風波『三聯生活週刊』二〇一六年

(http://blog.sina.com.cn/s/blog_470b2570102wmba.html); 二〇一七年一月八日閱覽。

㊷ 郭千寬「二本雜誌的傳統与困境」『南風窓』二〇〇四年第一期 七九頁。

㊸ 振興中華讀書活動と保守派の讀書観について、『京都大学大学院教育学研究科北京師範大学教育学部学術交流活動報告書』二〇一八年版（刊行予定）収録の拙稿（『The Politics of What to Read: Cultural Conflict in the Reform Era of China』を参照）。

㊹ 朱偉「『讀書』記」『當代作家評論』一九九四年第一期 六〇—六四頁。

- (六) Edward X. Gu, "Cultural Intellectuals and the Politics of the Cultural Public Space in Communist China (1979-1989): A Case Study of Three Intellectual Groups," *Journal of Asian Studies*, vol. 58, no. 2, 1999, p. 389.
- (七) *Ibid.*
- (八) 許紀霖「中国知識人論——80年代から2000年代へ」、『愛知大学国際問題研究所紀要』第二十七号、二〇一一年、一一二八頁。
- (九) Gu, 1999, *op. cit.* に掲載された名簿をもとに、筆者が集計した。
- (一〇) 前掲 朱『読書』記 六一頁。
- (一一) 高原明生・前田宏子『シリーズ中国現代史⑤——開発主義の時代へ——一九七—二〇一四』岩波書店、二〇一四年、八三—八四頁。
- (一二) 毛里和子「中国一九八六—八九—民主化の夭折と国際環境」、『国際政治』第二十五号、二〇〇〇年、一四二—四三頁。
- (一三) 楊々永『読書』十年——一九八六—一九九〇』中華書局、二〇一一年、三三四—三四二頁。
- (一四) 佐藤卓己「ファシストの公共性—公共性の非自由主義モデル」、『岩波

- 講座現代社会学—四 民族・国家・エスニシティ』岩波書店、一九九六年、一七七一—一九二頁。
- (一五) 『中国出版年鑑』一九九〇—一九九一年合併版 二頁。
- (一六) 前掲 楊『読書』十年』三六八頁。
- (一七) Zhang, Yongle, "No Forbidden Zone in Reading?: *Daxin* and the Chinese Intellectuals," *New Left Review*, vol. 49, 2008, p. 8.
- (一八) 『人民日報』一九九五年一月一日五頁。
- (一九) 前掲 高「范用・給普通人辦『読書』」。
- (二〇) 汪暉・黃平「序」『読書』雜誌編「不僅為了紀念」生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇七年、四頁。
- (二一) 陽敏・姚洋『読書』事件四人談』『南風窓』二〇〇七年第二五期、五三頁。
- (二二) 前掲 許「公共知識分子如何可能」三七頁。
- (二三) 佐藤卓己『現代メディア史 新版』岩波書店、二〇一八年。